

地前の菩薩の生れる相淨土は、第七識（妄識）を無漏智に転じたとき受用できるものとする。つぎに離妄真の淨土は、第八識（真識）が次第に妄識から離れて、本来の無漏清淨の智慧として活動する段階で受用する淨土であり、純淨真の淨土は純粹な真識の受用する淨土であるという。ここに慧遠の唯識的立場が示されている。かくて華嚴経や十地經論の淨土教説を唯識学的に解釈することによって、後代の華嚴宗の淨土学にも尠からざる影響を及ぼしたし、また、無量寿経義疏や觀經義疏を著し、やがて善導の批判の対象となるなど、慧遠の淨土学説は本格的なシナ淨土学の成立のための一つの重要な基盤を成している。

國際東洋學者會議と仏教學

佐々木現順

東洋で初めて開かれた學術會議は千五百名の學者からなり一九六四年一月四日—十日に開かれた。私は幸いインド政府の招聘で参加したので、別稿で國際的學問の水準及び新しい仏教學の方向について報告をなした（「第26回國際東洋學者會議より歸りて」印度學仏教學研究第二卷第二号参照）。

今は學問から離れ、視点を日本内に限りたい。我々は會議後、各國の學者と共にインド社會學研究の爲、各地方に分れて研究旅行をした。その討議の中で、私かに感じた學問以外の一・二の印

象を記したい。

その一つは日本仏教教團の世界史に於て占めている意味についての印象である。そもそもインドのヒンズー教の現實は日本に於ける如き宗教教團を持たず、而もインドの道德的政治的の中核となり無害主義というイデオロギーの基礎となっている。他方、西洋に於ける教会は依然として、Ecclesia的要素を基盤としている。Ecclesiaのないインドのヒンズー教が而も現代インドを指導する根本的思想となっている。ところが西洋は教会組織を持ったEcclesiaの歴史をふまえている。では、日本仏教の教團はどこに世界宗教史的な位置を保っているであろうか。この問題に答える為には仏教の持っている教團をはなれた人間存在（Dharma）の基調とEcclesiaの持っている対外的自己保存の組織の意識との総合が注意される時、その解決を見出す。インドに於けるサンガの滅亡はこの二つの要素の統合を欠いたところから起ったと考えられる。即ち、本来的に無教會的ヒンズー的であった仏教がEcclesia的方向でもなく又、ヒンズー的無教會的方向でもないあいまいな存在であったことにその滅亡の原因があると言える。その理由はインドのダルマの概念が個人的倫理と社會倫理との二要素を持っていたにもかかわらず、それが歴史的現實に於て看過されて行つたからに外ならない。又、エクレーシア的キリスト教の組織についても一九三五—四五年の間に約二千の地方教会が閉鎖されたという事實を知らねばならない。然るに日本では十七世紀初頭までで建立せられ終つた寺院が、それにもかかわらず曾つて閉鎖された実例があつたであろうか。その理由は何であつたか。それには仏

教団が Ecclesia 的組織でなかったという一つの原因があるのではないだろうか。それと違った寺院の本質は何であったであろうかと考うべきである。西洋と違った日本仏教団の世界史的意味の一つをここに見てよい。故に、日本仏教団に於て見られる「サンガに帰れ」というスローガンは国際的歴史的に見て実はいくたの疑問をはらんでいる。日本仏教団は西洋及びインドと違った別の新しい方向を持っていた。又持たねばならないであろうからである。

次に、人間存在の歴史という観点から日本歴史をとらえた場合、一貫している根本原理は日本人の持つ原始民族のアルケタイプとしての Group mind と現実の問題となつて人口過剰とであり又、あつたと見られる。現代社会に今なお残る家長主義・能力の無視・個人的情実等の原始民族的悪徳はこの二つの Neigungen から出ている。この悪徳は僧俗に通ずる。このことは海外にある所謂僧或は俗なる日本人グループに於て顕著に見られる事実である。日本人同志の推薦が国外に於て必ずしも信頼をえないようになってきていることもこれに起因している。僧にも俗にも優位をおくべきではない。仏教学はヒューマニズムに根差した人間の能力主義を基調とする。

蓮師における報恩称名の教条

藤原幸章

蓮師教学の特色として常に注意せられてきた報恩称名の教示は、旧来一般に「能称の意許」（称名の称念）を示したものととして、それは特に称名の仕方に関する問題としてのみ理解せられてきた。然るに私は今これを単に口業称名の問題にのみ限定せず、広く身口意の三業を場とする信仰生活全般を包むものと考え、ここに我々の具体的な念仏生活の指標を求めたいと思う。

ところでかくの如き解釈は、蓮師の直接表現に従う限り必ずしも妥当ではないかもしれない。けれども蓮師が信の上の称名を特に報恩称名と表示せられるとき、それは「念仏の本行」を軸とした「常に彼の仏恩を念報する」信の生活そのものを包むものといえないであろうか。蓋し蓮師は信心の生活一切をあげて「御恩報尽の念仏を申す」生活として包括的に示すことによつて、真宗を民衆の中に直結せしめたものではなからうか。このことは我々の信仰生活は即ち念仏生活であり、そのまま御恩報尽の念仏を申す生活であること、更にもともと蓮師教学の表現は特に簡結平明を旨とした事実を顧るならば、自ら肯かれる所であろう。この意味において「弥陀をたのめる人は南無阿弥陀仏に身をばまろめられたることなり」とのかたちにおいて摂取不捨を体験した蓮師が、